特71
658

仲國エドシエー又シエー原著

日本淡淡子愛庵主人水谷譯

情態奇話 七癖

吾嬬孤

東京 稽古堂

れども夫に引かへ父親の力蚤咱兒の歸宅を悦ぶものから晝間の事件の氣に懸るは心の中何と無く穩かならぬ樣にて然かれば丹を毫も面に顯はさず眼似笑やかに物しつゝ卓の上なる鹽豕を手に余上て路易に對ひ什度に孩兒よ此度の旅行は如何にありつると思ふに甚く勞せし日も多からんが或は又面白しと思ひし時も有つらんと問ふ穢けられて路易は此時取敢へず仰する如く厭にしと思ひ日も又無にても候はたる旅荷物を傍寄せおから咎ふる樣眞に父君の大概は悦快にて候ひしと問て老父は打点頭丹ど妙事にありける旨定て話說の多からん些語

して聽さずやと云ひつゝ乍打笑ひ這近年は我お
がら采るゝ迄に氣性しく萬事につけて背後より
逐いるゝ若き心地おるが是も打寄する年波の所
爲おらんと最可笑然は是遥々旅路より歸り來り
て勞もあらんと其推察も無く一向に迫たてゝ
聽かんとせしに心付きお紀事おりし斯いふ我さ
へ食物欲しと思ふ時刻におりつるものを和郎に
定めて空腹おらん卒夕餉を喰べおがら綾々話說
を聽くとせんと云ひつゝ大小二片に切放しさる
塩茶の大きやかおる一椀と食麸包の過半を分ち
我兒の前に推遣りて是より二人に食に就きしが
僅に一口二口と喫べも畢へて力盡に傍への冷

水に咽喉を潤ほし卒話さずや如何ぞと老年る親
父の性急も我を思ふの厚紀ぞと思へば最々忝け
おしと路易に急しく手に持てる高脚臺を下に擱
在て乃も此度の旅行ほど心易くて無造作おるい
絶て是迄覺えもおく實に容易ことにてありし元
来今回の所要と云ふに咱雇主と彼の多爾おる羅
門氏との間に幾件の約條あり て其を取極の役お
是ば唯此方の下案を持往き彼方の意見を問ふま
ておれば勞る程の事にておかり紀然れ案外
手間取りて遂に彼地に五日餘り日數を消耗てい
ひしと語れば老父に食麸の麸包を片手に持おが
ら乃は最客易き使者おりし什麼其の羅門と云ふ

人に如何なる氣質の東西なる乎と問へば路易は苦口し氣を面を顰めて語るやう世に希有なる人物もあればあるものにて候ふ彼の羅門と云ふ者は世界に又と有るまじき最も卑劣の人物にて此上も無き吝嗇なりと語る折あら力盛と何とか欲けん忽焉として袖を拭ひ然はて吝嗇き人なりせば定めて家は冨裕なるべしと問はれて又若ふるやう其遇は深く知り申さず且仰ぎはへども大凡世に吝嗇家とも呼ばるゝ中に冨めるもあまど貧家きも亦渺からず吝嗇き者は悉皆く冨裕なりとは斷言難からんか扨は右も左も彼人の頑細の事件まで彼覺と

意を配る動靜を見るに廻吝嗇のみならず貧婪つて飽くこと無き強慾非道の處置あれば彼人は仰もる如く定めて巨万の貯藏あらんと最思はし氣に言ひ放ては老父も最う不審氣に和郎が假しも冨貴の家に成長り貧苦伐知さる者ありせば黙思いんも道理なれど斯在貧家に育成し身の假令何程羅門氏が吝嗇ありとて其が生計は我等が比に非ざるべしと思ふて居しに誤認ありしか貧苦に慣し和郎でさへ堪へ難しと思ふ迄吝嗇にてあらんには定めし平生の活計きへ我家にも劣れるならんと呟くを見て路易の語ふ樣否々役所の活計を以て我家に比ぶれば斯に彼の優れるに中

す迄も無き輝にて彼羅
召使ひ一軒建の居宅に
二四三四の有もありて
ばかりの蔬菜もて纔に
の相違あり爾にあまど
りとも彼が如き守銭奴と
富貴も富貴と爲る足らず
く中々無きぞ心安かる
りて娯楽かれと羅門を
不審る面色にて遠に心得
し彼の家の客に我と
に斯程に差別より已

に比活計にて在るが如し彼羅門氏に下畀きへ二人まで
優りて住ひて食事毎に少くとも
我々若き割棟住居に摘む
職を肥を身とに宛然天地
巨島の財貨を積た
家に巨島の財貨を積た
一生を過さんに
有るも益
百倍優
益々

に分明おるにと云ふを路易に推返して慈父我等
に貧しくとも是ぞ所謂清貧にて慣ては然程苦と
も思はず偶に折に觸事に當りて身の音雲を冀望
ふ時の無況にあらねど丹も亦我身の榮燿にとて
希望むにはいはず御年齢を重ね給へどもいまだ
御心も安まらぜ旦暮齷齪拵了給ふ慈父に逸樂を
今爲中きんと思ふよりは望になれど是將窮迫時
ありと曉りて覩れば非分權の望惡の事と自己が
身の非をしも知りていへば不義の富貴に願いし
と思ふ我身にはいもの豈敢我家は貧況を不足に懐
ふ念あらんと最潔よき我兒の言辭に力査い數回
打点頭て居たりしが和郎が今の一言にて赤心に

知るに足らり徳る不如意の家に在りて和郎に不滿の意あきい即ち我身の幸福ありと最笑まし氣

云ふを聞き不如意い慈父も同じかるを豈敢我

一人憾む可きや殊に我家貧しといふとも朝暮の

生活に辛を欲かす唯僅に欠たるものは餘裕のみ

いんと云へば老父に頭を振り否と餘裕のみ

おらず往て生活に事を欠けりと聞て路易い打笑

おがら然る事いまド我儕を以てこれを觀るに

珍味佳肴い無しと雖ゑ三度の食事を欠に至らず

飽まで食べて饑を知らず現にこれ嚮いや四斤の

麭包も既大概い竭る迄に與了たりとも窮氣を

左の若く慨令垢深古びたりとも衣服とても亦

是

に足て足るり住居い五層の上あれど是亦兩露を避

るるに充分にして餘りあり其上二人が挿了て

年々に得る所も七百圓餘に候いん殊に我等親子

の者い貧乏と表面に顯いし他人に見榮を餓らね

は心苦しき事も無く借財等もあるまあらど足ら

て事足る心安き斗を越父の斯までに心を惱ま

給ふにやと問れて莞爾と打笑ひ老朽折し我あ

るもの爭て榮華を願ふ可き和郎い猶弱年あれば

他人の富貴を聞くにつけ羨ましくも思ふらん家

の貧苦を見るにつけ悔しとも思ふらんと和郎の

肚裏を推量り我意に擬へて如此〳〵と問試みし

事ぞかし其意中を聽くに自らい倍々我も安堵たり

弱年より似氣無き和郎の覺悟に親益しと思ふあり
アナ愛たしと謂へらま路易に今更間の惡る氣に
夫も是も父上の生平の御教誨を忘れざるに因れ
るのみ我儕に又慈父が無かし不足に思食らんと
其れのみ心に懸りしが只今の仰を聽き大に安堵
つかまつりぬ假令貧く活計とも斯て氣安に世を
送らば彼の巨萬の財貨を貯てど尚貪つて飽くこ
と無き強慾人の羅門等に侵れること萬々なら
んと云へば老父に打笑ひ動輙れば羅門氏を嘲り
笑ふに何故ぞ和郎が彼所に在つる日何事か快よ
からぬ思ひし事の有りしかるか問に路易
に此時に怒氣を含んで對ふるやう彼が貪欲強慾

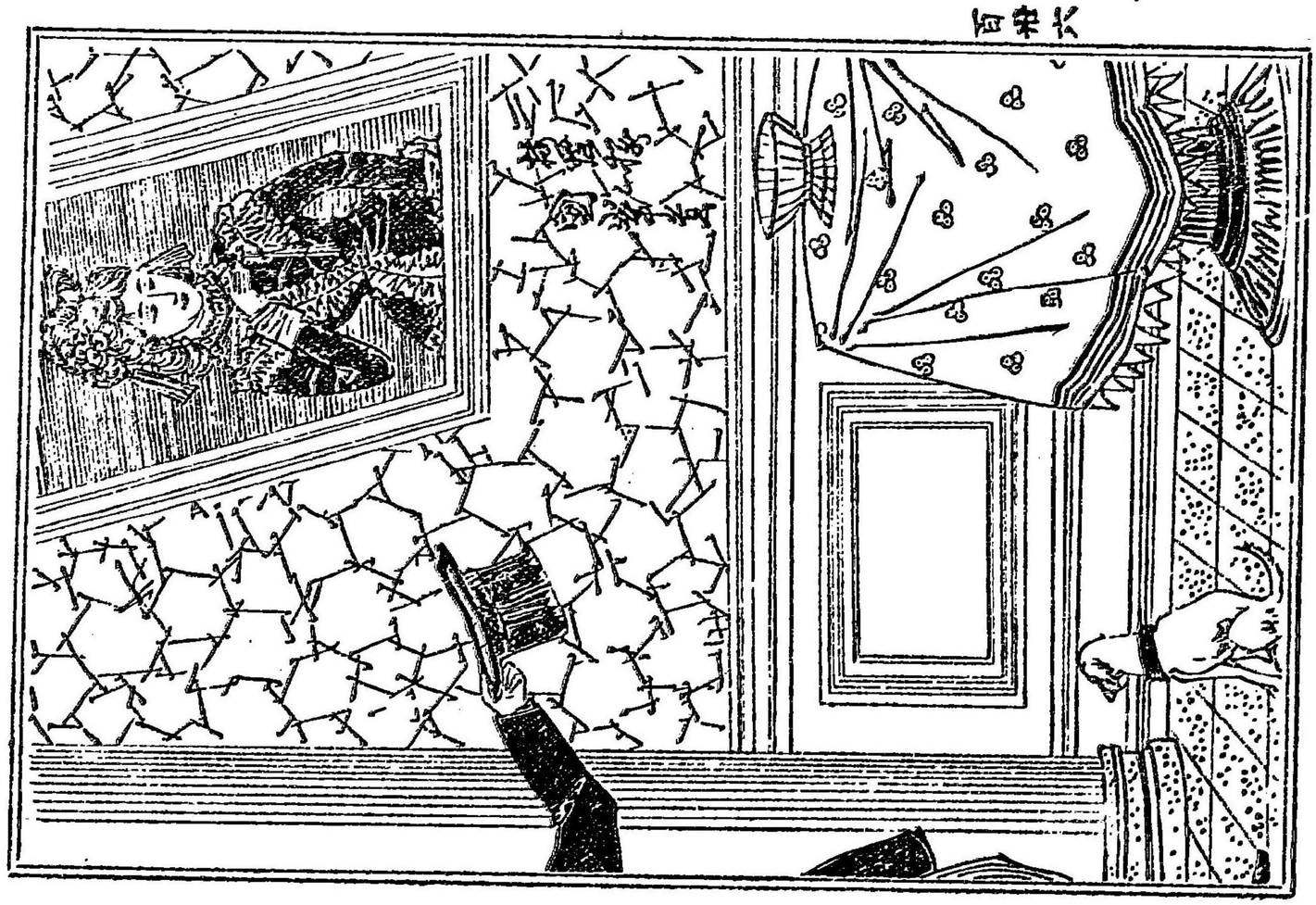
ある實に言語に惡し難し思ふに僅々五日間滯在
せし我儕あれど堪へ難き迄苦楚を覺え一程に候
へば何人にまれ彼人と暫く住居を共に爲ば必ず
居常に諍論の絶る期に無かる可して聞て老父に
不審氣に和郎が彼所に在りつる中苦楚を受しと
あ開に怪しかる事あり兎に角に客人あ
るに甚度おる難儀を與へしぞと言辭悪しく問懸
らも否々彼より直接苦楚難儀を與へしあらねど
其緣故に斯おりかし已に先刻にも棄しい如く彼
が居宅に手廣に食事毎の下物等に何樣我等
に優しと開が居宅の光景に床板所々朽損して
是程高く歩行まんも危うく四壁に彼首是首頽落

て臥床に居て星を見る可く故に室内の窓氣杯は戸外と同一く思いれたり庭園に光樹多くて何日も掃いざれば落葉に積て堆たかく朦々として白晝をば暗く怪しき陰惨なること言ん方おく恰も墓地に踏躙したり其が中を徘徊する召使の下婢を見るに孰も主人に奇酷く逐使役して勞れしか面色青ざめて痩ほうけ餓鬼かと怪しむ計りおれば廢寺に怨ふて面前幽鬼に逢ひし心地せらるぬ又日々に食物い下婢等の食料まで主人手自配賦して貫目に愚ぬばかりある猫の足も思ふに彼家の鬼娘女が再四三四見廻りて猫其うへを減殺せば衰れ枯所の下婢共い何日とて猫食に飽く由おく偶々く

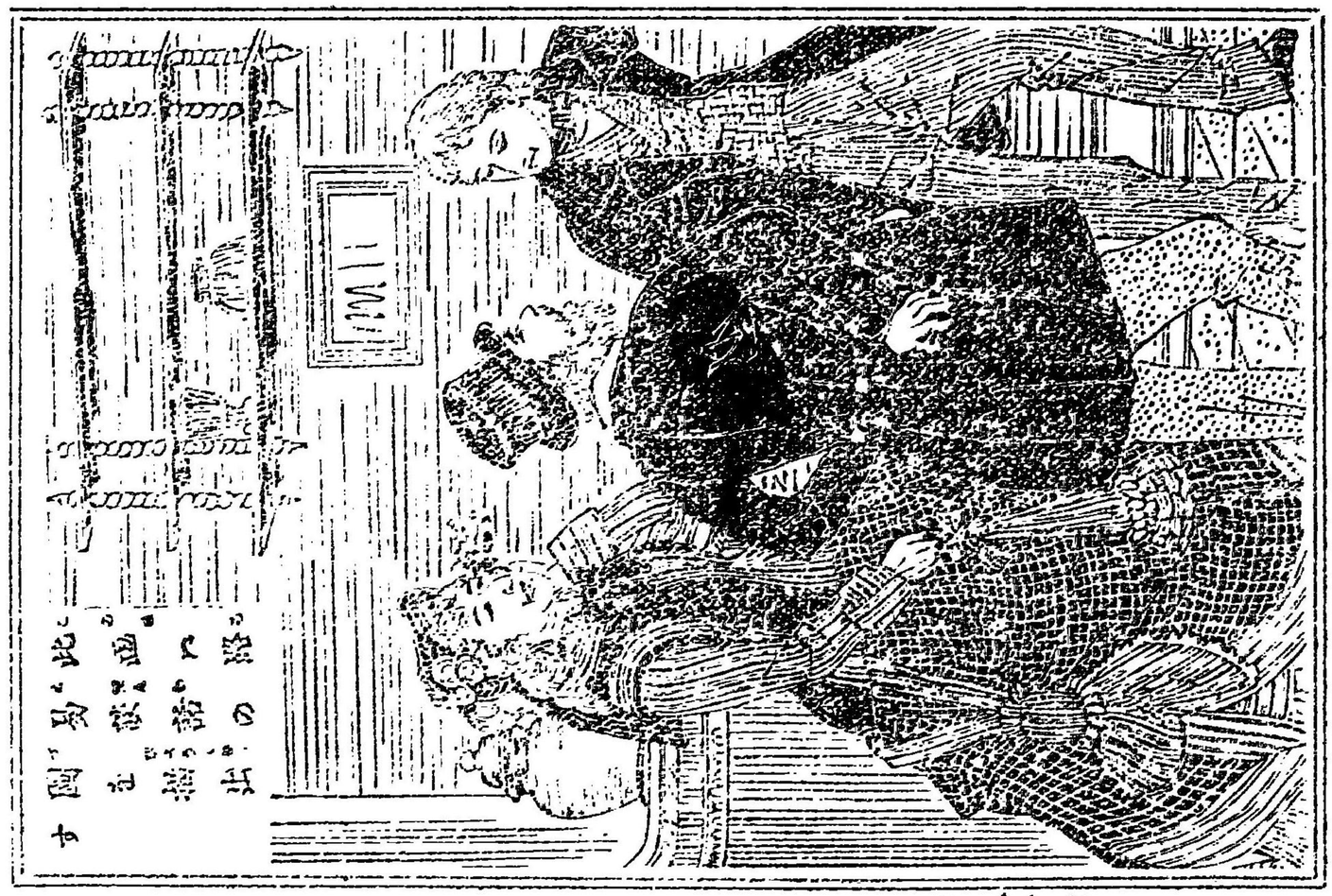
些の食殘しあれば彼鬼嬢女が持去て悉皆くこれを戸棚に藏め最厳重に鎖しを固め鑰い其身の腰を離さず法る容子を見る我儕い豫ても知し召されし如く元来至つて食物の消化の遅き性質おるを見るに得堪へぬ客嗇を快よからず思ふを以て毎も食事の卓に對へむ何とおく食欲すゝまず少々喫べて止むを以て暫時過れい又忽地もの欲しくありて堪難く是に甚く苦みしと唧言がましく語るを聽き和郎い何故然ほどまで件の親父弁に其最愛嬢女を擲欲の若く口逆く言罵るぞ乎素の氣質に似氣あしと云はるて路易い点頭あがら嘸不寂く思食可けるど开い越父に彼等親子を

見給はねばこそ然仰も是況て鬼嬢女の異容なる可憐嬢女おんどゝいふ奈で猶敝し得らる可き彼が容貌は奇怪なるに妻コロコロ説べくもあらねば取摘んで概略を話んコ是も亦骨と皮のみコて現世の人とも思はれず斗が心根は能迄も片意地コし て邪僻かれば到底他人と交際を爲もべう も非ず し て面貌は恰も碎胡桃器の形コて格外れある醜き鼻は赭色コして煤毛コ似たり頭髪黄コして薄少く歯は汚黒て亂株の如し紙令造主が戯まコも改よ術を盡し意を用ゐむ事は斯まで稀有ある者を造り出し得らるべきと思ふ計りコ候ある閑て力盡は苦笑ひおし和郎は元来彼親子を忌嫌

ふ心より一層嬢女の容顔も醜くこそ見えたるから め爭て和郎が語る若彼希有ある者が世コ在らんや開は兎も角も俗にいふ若く婦女の美あるい極て多淫コ醜彼コ賢女多しと雖の醜美は撰むコ足らず心の美おそ望まし けれ然は我は平生日来醜彼女子を見る毎コ最可憐しと思ふ ば路易の對ふるやう如何コも慈父の仰ぼる若く我儕も亦爾思へり故に最初彼女子を見たりし時思へらく斯程醜顔人品コて嫁コ適く可彼先方もあらねば邪コ来たらん男子も有るまじ一生寡婦て送るからん其上おらず世コ稀ある客嗇人を親と爲る幸おき女子の身の上よと没コ憫然思ひ



四宋长



四川十七

し彼が迫々く彼が動靜を見る
彼思々くしき舉動して開が下卑等を逐使ふ樣い恰
も牛馬を驅役若く憐憫を加ふる体も無く口進く
其實り先も語り中せし如く彼が父が配賦して
不足がちなる食料を尚其上に幾分か下卑等の口
を減殺る彼奴が殘忍非道なる所業に見るつけ
當初悶然と思ひたりし念い忍然消失せて憎む心
の起りしよりその間求い彼奴を見る毎求めて扰
敵候ひしが偶心付て思ひ見るに身い是雇主の代
理なるに益無き事より寧が一禍害を惹起し雇主
の不利を嘱しもせば開より忌々しき大事をらん
足より後い脚を探りせば開より忌々しき大事をらん
と聞て老

父の又問ふやう然い語へ彼家に在つる間不快の
みにいよもあらじ偶まに對散爲し事あらん
すらんと云を聞路易い頭を打ふりて否とよ彼家
へ若せしより發途る迄五日間涙赤眼に附纏れ
苦ゝのみにて半日だも辭散い無かりしと苦み絶
て言散てば和郎い免角惡樣に彼嚴御を評それど
我い又然い思いも聞が如き女子とも真に強氣の
女丈夫とも家政に練熟き女性とも稱擧つ可く思
ふありと頻りに賞贊もるを見て路易い強ち爭い
す好も惡も其遂の綜い我等に關係る事をらねば
何れ人々の肚裏心中に委せおんといへ總
て源が家風い奇異ある事の最多く怪事を見たる

日も有しと語るを聞いて不審氣に怪事と抑何事ぞと問れて路易にきれば其怪事とは他事にあらず我濟彼家に在つる時且ある一室に美艶なる夫人の画像の有りけるを彼鬼嬢女に何事か恨めるの事の有るならん其が画像を種々に惡口する事を打聽しが斗も彼の画像に何者あらんと不審み居りいひしが一日偶ま新を得て窃に彼の室に入り件の画像を熟視るに男子婦女の相逢いあるを曾て我濟が其以前同窓に學びたる其一人の面体に似たとは疎か生寫にて完然彼人に面會心地し熟く思ひ廻せども彼人すと此像と或時主人に母子なる何氣無くも知る可あらず同恥おるも

画像の事を問ひ試るに今は此世に亡き人なる主人の妹柔的邸夫人なるを聽き若し然らんには同姓なる子息一人在さずやと問つる時羅門氏は俄然に面色土の如く宛然物に悸慄して其が傍に居合せし彼鬼嬢女も俱共に驚く容子不審ければ事故とあれと屋へ問へば太やかなる息を吻て妹に男子あれど世に比類無き惡漢にて思ひ出すさへ胸惡し何あれば渠奴等に伯父と呼ばる、運の惡きよと將震にして語りきと聞も平らぜ老父のいふやう柔的邸夫人の息男とは踪て不品行惰と聞ける柔的邸氏と云ふ壯年ならずやと問懸られて興醒面に何と仰す

る不勒斯丹(桑的邸の名)が不品行とやと愕然訝る狀態を見つゝ老父は打笑ひ和邸然まで遠く事ゝ曾ね我が聞くのみならず現に伯父卿の口吻からと云ふを推し推禁め免まあれ慈父聽に給へ我僕學校に在し頃彼桑的邸とは斷金も當あらざる交りありしも學校を去りし以來絶て久しく面會ざりしが今より大略六月以前或日我僕所用ありて大街を通り懸りし際往來の人々打集りて車道の方を打眺やるに何事あらんと我僕も運歩を止めて眺むるに其時車道を馳來る一輛の馬車に駿馬二頭に引かせつゝ四邊を拂ふて見ゆる迄翠煥やかなるものかるゝ美麗に我人共ア

ナ美しと賞贊おう暫時有みて在りつるが彼馬車は其所まで來て忽然馬脚を突停め馬丁は大地に飛下りて馬の鑣を取る間もあらせず馬車を下り來る其人はあるぞ別れて程久し紀桑的邸氏に候ひし其時我僕の扮裝は平生も換はらぬ乘色の最垢深し上衣を着て色も白けし黑の袴弊たる靴の汚繊き様は誰が見ても一目にて役場の書記生と知らるゝ由で賤陋げあるを聊かも彼人に厭へる容子無くつか〳〵と寄來り我手を採りて懇慇に別後の情を陳述ければ傍邊の人は興を醒し聚皆我を凝視り訝り思ふも無理おらず我さへ當時は嬉くも又羞澁くも思いれて得も言れざる心地あり

丨其時桑的郎のいへる様此所い往来の道路おれば他の見る目も最蒼蠅和郎は往方ゑ伴はん卒と強て誘引ゆき馬車ゑ吾儕を推乗し馬をば驅らし行途中互に舊事を語合ひ頻役場の前に到り然らばと袂を分つをり必ず近日ゑ訪問来よと諄々言ふて別れしが丹も彼人は善愚に只此一事を以て推すも其性質に知るつるものをと云へば老父に晷ぶ色おく丹に只人性の本善ある謂ば一時の感動より意にず如此せ丨事あらん元来させる華美家に曾て我儕の悪む所殊ゑ和郎に此等の人と交際る可き身柄まあらず假令此爾後見懸るとも此方より避ゑて面會ぬど好きと云へば路易に打

点頭信ゑ仰もる如くおり然れど當時来よ往んと迭ゑ約束做しつるを往かてい信義を欠ゑ似りと一日日曜の暇を以て彼人が家を訪ひしゑ貧窶氣ある一書生を毫も輕んず客子も無く宛然貴顕を迎ふる如く最鄭重ある待遇ゑて彼と我との語談の体に是も亦昔時ゑ變る事を恰も同輩の交際の如く歓を盡丨ていひしが其後聞くに彼人も亦旅行ゑ出丨由おりと語るを聽いて眉を顰め然る事の有りつるか丹を和郎に只今まで何ども我ゑに告ざりしと訝り問へば莞爾と笑ひ嘲訝しく思食さんおれど丹も當節告げ来らで秘丨置丨も故ある事なり其を何取と申さんに當時窃ゑ思ひけ

るゝ若慈父ゝ如此くおりしと彼一條を悉細ゝ聞あえ孝らゝ慈父ゝゝ最深き慈愛の餘り扨ゝ賤息ゝ見も慣れぬ大家の供帳に惑して自己の貧れ境界を跡む心の起りしかと疑懼たまふ事もやあらん歟ゝゝ御心を慰めんとて却て勞劬を被けて孝ることゝ思へば其儘ゝ今日まで申し上ざりしと聞きて老父ゝゝ數回嘆嘆し今ゝ初ぬ和郎が孝心に歡喜ばしさの極りゝこそ斯まで優き和郎ゝゝ為に茲ゝ一條の商議あり開ゝ當和郎の為のゝあらず我身ゝ取りても幸福多かり語り出んゝまゝ聽きいへずと云つゝ膝を前むるゝぞ開ゝゝ何事にいぞ聽きいらずも同じく膝を前め最不審氣ゝ力盡が面を從容と路易

打瞻り開が語出るを待居たり折しも室外より呼脊ひあがら入来る人のあり親子一齊回顧みるゝ對ひゝ是あん此家の門守あり其所へ来りて路易ゝ取出し路易ゝ交付して此時ゝ云つゝ一封の郷書を路易君貴様ゝ来狀ありしと先刻他に托されたる欲名刺をも力盡の目ゝ解ざる様路易が手に交付さんものと思ひつゝ少時躊躇居たりしが親子對座の事あまゝ窃ゝ交付さん様も無く如何いせんと思ひしが漸くゝして心ゝ点頭路易君貴殿後刻まゝて戸外へ出給ふ用事も有らば其折我舍へ立寄て脊を被けて給へかし聞へ申も事の有るにと云遣て身を反し路易が承知の返答を脊後

に聞きて出行きけり斯て路易は受拿し彼書狀の表書を口の内に讀む折しも力蚩は件の書狀を眼を斜めにして打眺め心の中に思ひけるは今日此家に歸りたる我兒へ宛て他人より書狀の來可き道理なし遠は是今朝彼少女の依頼を受けて我が筆し書狀とこそ思はれたり彼書狀おもに表書に多爾と記す可かりしを故意に巴黎グレヲル町と認しは此所へ屆かん術計なり其のみならず大切さと云恰好と云我手に掛けし彼書狀に相違なしと察してければ疾我兒の披けよかしと思ひしが思ひ反して路易に對ひ書狀に後刻讀むとして今端緒を聞きかけし我と和郎の身の上に關係ひたる

要件を先にせばやと思ふおり然れ書狀も急用ならば商議を後にせん和郎の都合甚麼ぞやと云ふ間路易は手に把てる書狀を卓上に差置きて急を要する書狀にあらねば御談話を拝聽申さんと形を改め力蚩が說出す言をぞ待ける畢竟力蚩が甚事をか說く开れ次回の解釋を待ち給へかし

第六回

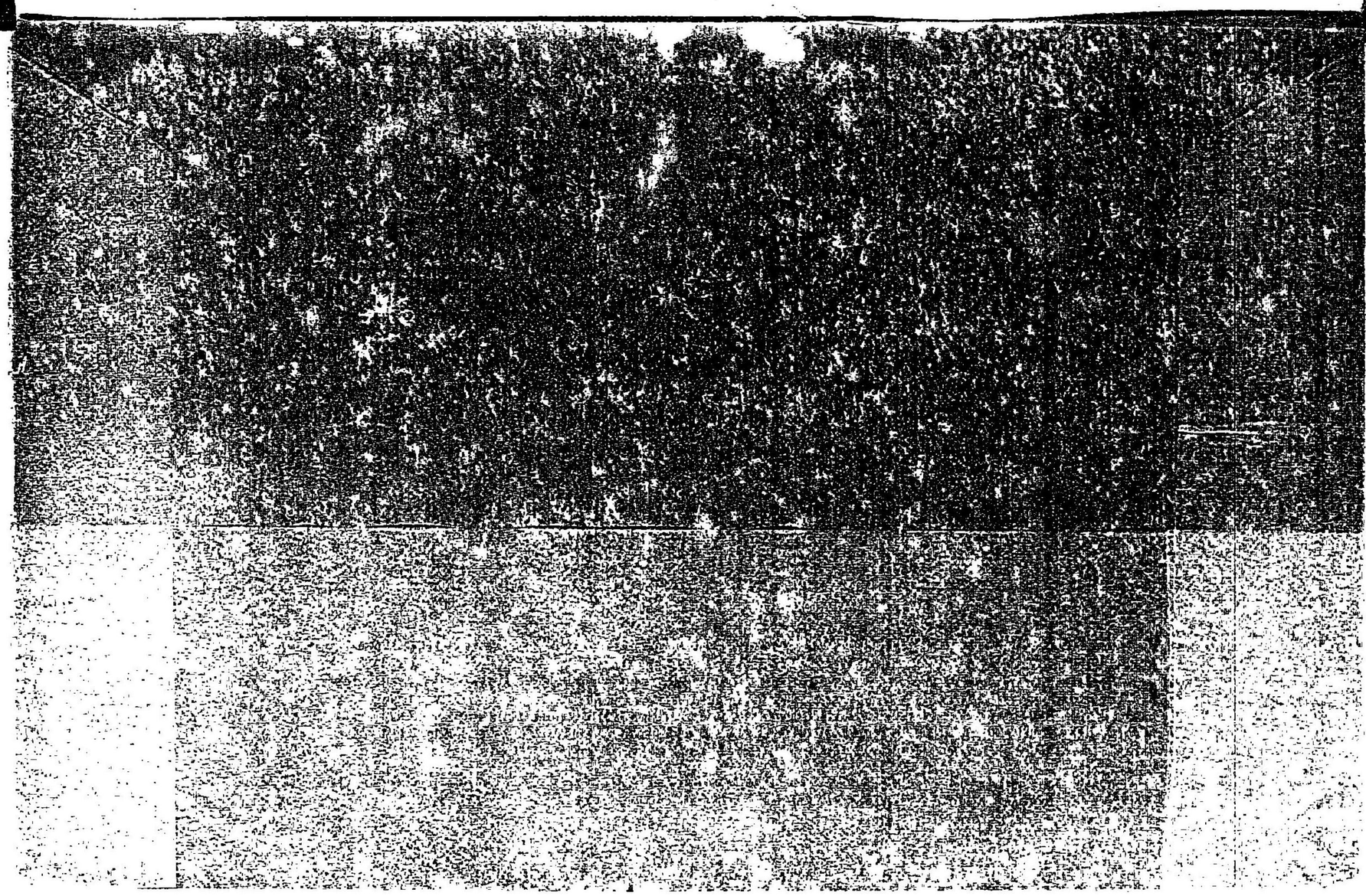
老人の慈婚家の富貴を說き少年の信情婦の志操を語る

登時老父力蚩は少時黙して居たりしが從容として說出るやう和郎に協議仔細と云ふ和郎が平常の苦心を今日費施做る機會にぞあると意有り氣お老父の言辭に彌不審の晴やらず何まれ仰聽

けられよと促を言辭る老父力説言んと欲て數回く
嘆嘆し今後益る繰返し語はんも老の愚痴る似た
まと思ひ起せば了得る昔時懸し如我が身の上往
時は生活も人並に不足不自由も無かりしが其後
續く不運漸次〳〵る傾く家産交て加へて其頃る
和郎を産みし母親に産從の惱強くして幾程も無
く没故しが醫藥の料や死後の入費何や角やるて
些計り貯蓄置し財さへ大方いみお消費捨て僅
々に殘る金貨を以て漸く和郎の學資に充てしも
是きへ終る全く竭き據ところおく代書を以て幽る
其日を送る身と成も落たる果散おさよと云つゝ
ホツと太息吻く老父の心中を察し遣る路易に共

明治十七年十二月十六日御屆
同　十八年四月　日出版

定價八錢

飜譯人　神奈川縣士族　森澄德聰　四谷坂町百廿二番地
出版人　靜岡縣士族　中村正義　四谷坂町百廿二番地
發兌元　稽古堂　四谷坂町百廿二番地

国立国会図書館